

Ramazanoglu, Caroline and Janet Holland, 2002, "From Truth/Reality to Knowledge/Power: Taking a Feminist Standpoint", *Feminist Methodology: Challenges and Choices*, SAGE Publications, 81-101.

キャロライン・ラマザノグル, ジャネット・ホラント, 2002, 「真実／現実から、知／権力へ——フェミニスト・スタンドポイントから考える」

※ ( ) の数字はページ数を表す。

### レジュメ作成者による紹介文

本稿は、フェミニスト方法論の理論および実践を体系的に整理した *Feminist Methodology: Challenges and Choices* に収録されている。本稿は、主要なフェミニスト方法論のひとつとして挙げられるフェミニスト・スタンドポイント理論について概説している。

## 1. 導入 (60-61)

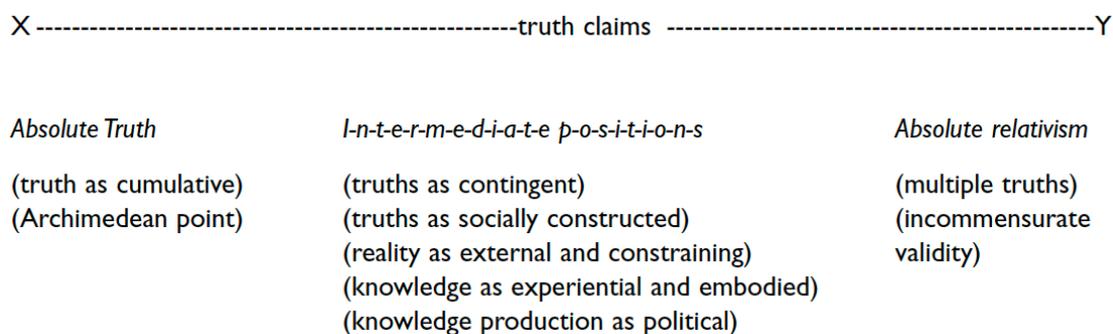
- 女性の生活は一樣ではなく、階級、経済状況、セクシュアリティ、人種などによって異なっているため、ジェンダーに関する一般的な知識を生み出そうとするフェミニストの試みは困難に直面する。本章では、フェミニズムの知と女性の多様な経験を、ジェンダー化された社会関係の現実に関結する可能性について検討するため、フェミニスト・スタンドポイントという概念に注目する。

## 2. 方法論の追求において「知るフェミニスト knowing feminist」は限界に直面する (61)

- フェミニスト・スタンドポイント論者である Donna Haraway (1991) は、棒上りの比喩を用いながら、フェミニストが直面する方法論的困難を説明している。
  - Haraway (1991) は、ジェンダー化された社会生活に関する有効な知識を生み出だそうとするフェミニストによる試みを、油を塗った棒に登るような極めて困難なものとして位置付ける。
  - Haraway (1991) の比喩においてフェミニストは、科学へのコミットメントとして「信頼に値する説明」(Haraway 1991: 188) を追求する一方で、相対主義的主張(フェミニストが「発見」する「現実」および「真実」はすべて、特定の状況、文化、思考方法において社会的に構成されているという考え方) を手放すことができない。

### 3. 方法論の連続体 (61-63)

**Figure 1 Scientific method: a methodological continuum**



- Haraway の議論を上図に示す。研究者たちは、上図に示した線上に自らの立場を位置付けることができる。X と記された極点において、研究者たちは科学的手法のルールを合理的に適用することで絶対的な「真実」を発見する (Haraway 1991: 193)。Y と記された極点において、研究者たちは絶対的相対主義を採用し、どのバージョンの「真実」が最も「正しい」のかを判断することはできない。
- フェミニストたちは、この両極の立場の論理をそれぞれ批判してきた。よってフェミニストは、方法論的解決策として自らを線上の中間的な点に位置づけるよう迫られている。
  - 例えば Sandra Harding の提唱する「強い客観性」という概念は、フェミニストの方法論を Y の立場から遠ざけようとする試みである。この概念を用いることによってフェミニストは、自らの提示するストーリーが他のものよりも「より偽りの少ない」ものであると主張することが理論上可能になる。
  - しかし彼女の議論には、証拠をテストし、知に関する主張の真偽を判断するための一般的基準が欠如している。
  - この挫折を踏まえ、フェミニスト・スタンドポイントという概念が登場した。フェミニスト・スタンドポイント論者は、自らの妥当性の基準を正当化することに主眼を置き、X と Y の両極のみならず、その中間的立場に自らを位置付けることをも拒否する。その代わりに、フェミニスト・スタンドポイントから考えることを通して、知と権力がどのように結びついているかを検証することを目指す。

### 4. フェミニスト・スタンドポイントとは何か? (63-73?)

- フェミニスト・スタンドポイント理論は、複数のフェミニスト理論や複数のフェミニスト認識論的立場に依拠するため、論者によってその定義は異なっている。

- そこで Susan Hekman (1997a, 1997b) とスタンドポイント・フェミニストら (Collins 1997; Harding 1997; Hartsock 1997; Smith 1997) の論争から、フェミニスト・スタンドポイント理論に共通する5つのスタンスを以下に析出する。
  - 1 フェミニストのスタンドポイントは、知識と権力の関係を探究する。
  - 2 フェミニストのスタンドポイントは、特定かつ部分的な社会的位置からしか「知る」ことができない。そのため、フェミニスト研究者たちは、特定の思考方法と知識の権威付けのもとで「知る主体 knowing self」として社会的に構成される。
  - 3 フェミニストのスタンドポイントは、感情や身体性を含む女性の経験に立脚する。
  - 4 フェミニストのスタンドポイントは、女性の経験の多様性と女性間に存在する権力関係を考慮する。
  - 5 フェミニストのスタンドポイントから見た知識は、常に部分的である。したがって、スタンドポイント論者は、自分たちの知識が一般的に正しい、あるいは「女性」にとって真実であると主張することを避けようとする。
  
- 以下ではフェミニスト・スタンドポイント理論の多様性を確認するために、Nancy Hartsock と Dorothy Smith の議論を比較する。
  - ① Nancy Hartsock——男性優位構造におけるフェミニスト・スタンドポイントの優位性
    - Nancy Hartsock (1983a, 1983b) はマルクス主義を引用し、ジェンダーに関する関係性を社会的かつ不公平に構築されたものとして分析する際に男性よりも女性の方が有利な立場にあることを示している。
      - 彼女は、資本主義システムにおいて抑圧的な立場に置かれている労働者こそが搾取システムとしての資本主義のありようを捉えることができるというマルクス主義理論を援用し、フェミニスト・スタンドポイントを「男性優位の構造において有利に働く視点」として特徴づける。彼女は、この視点が女性の生活に根ざし、認識論的に特権的であることを示唆している (1983b : 284)。
      - Hartsock は、女性が共通の物質的状況(従属的な立場に置かれている経験や状況)を共有し、共通の政治的意識(フェミニズム)を発達させる限りにおいて、フェミニスト・スタンドポイントが成立すると考える。
  
  - ② Dorothy Smith : 経験から出発し、女性のスタンドポイントを捉える
    - Smith は Hartsock と同様に、女性の経験を男性の権力に関する知識生産において欠かせないものとして捉えているが、経験と現実を結びつける取り組み方は

Hartsock のアプローチとはやや異なっている (Smith 1974, 1988, 1989, 1998)。

- Smith は、女性が女性であることの結果として、権力関係についての特権的な知識あるいは「現実」にアクセスする特権的な方法を持っているとは主張しない。
- Smith は女性に認識論的特権を認めないが、人々の日常生活の経験から出発することによって権力関係についての知識生産が可能になると考える。

## 5. 残された問題 (74-78)

- フェミニスト・スタンドポイント論は示唆的な論点を提示している一方で、そのスタンスはフェミニスト内部から批判を受けてきた。以下に主要な論点を示す。
  - ① 知る自己 knowing self がどのように社会的に構成されるかという問題
    - フェミニスト・スタンドポイント論者は、「女性」が固定された自己ではないことを認識している。しかしその議論においては、フェミニスト・スタンドポイントから知を産出することができるような「女性」が生み出される過程や、ジェンダーに関連する生活に影響を与える特定の力関係のありようは調査すべき問題として残されている。
  - ② 認識論的特権の主張に関する問題
    - フェミニスト・スタンドポイント理論は、ジェンダーに関して従属的な経験を持つ人々が、支配的立場にいる人々よりも権力関係やその物質的状况を「理解する」ことができるのかという問題を提起する。Maureen Cain (1990) は、Hartsock の主張する認識論的特権の議論について、「もし女性が従属的立場を失えば、その認識論的特権性が失われるのではないか」と問いかけている。
  - ③ 差異に関する問題
    - 特権的な地位にあるフェミニスト研究者は、女性の経験の差異や多様性を黙殺することがある。
  - ④ 経験に根ざした知識を産出することに関する問題
    - フェミニストの立場、女性の立場、あるいは複数の立場を「経験のなかで」根拠づけることは、フェミニスト・スタンドポイント理論の中心であるが、その実践においては依然として問題が存在している。Smith は、「女性の経験」の中にたった1つの真の現実があり、そこからフェミニズムにとっての共通の知識が生まれるという立場を避けるために、経験が知識にとって基礎的なものであるという前提を否定する。
  - ⑤ 物質的現実の概念化に関する問題
    - フェミニスト・スタンドポイント論者は、不当な権力関係を特定しそれに抵抗するために、権力に関する何らかの物質的概念を求めてきた。しかし、物質的概念について説明

する際、経験や権力関係をどのように結びつけるかについて認識論的な合意には至っていない。

⑥ 知識は複数存在し、部分的で偶発的で状況的であるという問題

- フェミニスト・スタンドポイント理論は、あるジェンダー関係の説明が他よりも「より良い根拠」に基づくのか、「より真実」に近いのか、「より部分的」であるとみなすことができるのか／できないのかという未解決の問題を引き起こす。

**6. 結論 (78)**

- フェミニスト・スタンドポイントという概念は、女性の現実を描くための示唆的な視座を提供してきたと言えるが、女性のスタンドポイントを本質主義的にとらえ、それを特権化する認識論として批判されてきた。
- フェミニスト・スタンドポイント理論は、知識に関する主張をいかに権威あるものにするか、権力をいかに理解するか、知識の妥当性をいかに判断するか、フェミニストの知識がいかに女性の経験や差異に根拠を置くことができるかといった論点をフェミニストに投げかけている。